

生活療育支援科・春の企画『新府中療育センター1周年おめでとう！』

生活療育支援科 田口美穂

6月8日（火曜日）に、生活療育支援科行事・春の企画「新府中療育センター1周年おめでとう！」を行いました。昨年5月30日に引っ越しをして多摩療育園と一つになり、新しい府中療育センターがスタートして1年になります。東京都は緊急事態宣言、院内は新型コロナウイルス感染症対策フェーズ2の状況下でしたが、なるべく多くの方にお祝いに参加していただけるよう企画しました。



まずは「お祝い飾りを作りましょう♪」です。ゴールデンウィーク明けに病棟・通所・通園の各部署に制作キットをお届けし、5月いっぱいかけて、1周年をお祝いする飾りの制作に取り組んでいただきました。当日は、2階生活療育支援科活動室5にそれらを虹にしたてて飾りつけ。「虹の間を気球に乗って、新しいセンターへやってきた」のコンセプトで、これからのセンターの希望溢れる未来を表現しました。室内には、愛媛発信のコロナ禍でも心のびやかに暮らせる願いを込めた、シトラスリボンやスタンプを「1周年おめでとう」と飾るコーナーや、利用者さんの撮った新旧センターの風景写真の展示も行いました。

もうひとつは「引っ越しを振り返りましょう♪」です。多目的ホールで、くす玉を割ってお祝い気分を盛り上げてから、1年前の引っ越しの映像を上映しました。自分や仲間が映って喜ぶ利用者さんや、「大変だった」「懐かしい」等と声を上げる職員もいて、各病棟10分程の引っ越しドキュメンタリーを楽しんでいただきました。

また、病棟訪問のミニミニイベントは、各病棟を回って、50周年記念歌「にこにこのたねたち」の演奏や、今回新たに作った「にこにこのたねたち」体操を行いました。テンポを落としてゆったりとした雰囲気生まれ変わった「にこにこのたねたち」が、新センターと一緒に成長していきますように。



そして、記念の植樹として、旧センターに咲いていたバラの挿し木に、土入れも行いました。病棟だけでなく、感染対策のために虹のお祝い飾りを見ることができなかった通所や通園のみなさんにもご参加いただき、12本のバラの挿し木が完成。しばらくは生活療育支援科でお預かりして大切に育てていきます。いつかセンターのどこかで咲き誇るピンクのバラが見られると良いですね！

〒183-8553  
東京都府中市武蔵台2-9-2  
東京都立府中療育センター  
電話 042(323)5115  
FAX 042(322)6207

\*-\*-\*ホームページもご覧ください\*-\*-\*

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/fuchuryo/index.html>

# ひだまり

都立府中療育センター新聞 第522号 発行日 令和3年6月30日

令和3年度 日本重症心身障害福祉協会全国施設協議会 参加報告

院長 澁谷和彦

5月21日（金曜日）に開催された日本重症心身障害福祉協会の全国施設協議会に参加いたしました。昨年の協議会は新型コロナウイルス感染の流行拡大により中止となりましたが、今年はオンライン形式の開催となり北海道から沖縄まで全国の126施設より426人の参加がありました。

今回の協議会における話題の中心は、新型コロナウイルス感染の対応でしたが、まずは別の話題で“医療的ケア児”についての行政説明がありました。現在、医療的ケア児は、低年齢ほど人数が多くかつ年々増加傾向にあり、特に人工呼吸器を必要とする児童数は直近7年で2.6倍に増加しているため、その対応が行政上の大きなテーマという話でした。次に、当協会の児玉理事長が特別講演を行い、「複数の障害者施設で新型コロナウイルス感染のクラスターが発生し、スタッフへのワクチン接種も完了していない施設が多く、面会や行事の中止や制限など大変な状況が続いております。しかしながら、その中で、短期入所や通所事業などを制限付きながらも維持しようと努力している施設が多数あることは誇りであり、頑張られている職員の皆様に感謝いたします。」との話がありました。

3時間に渡るシンポジウムは、全て新型コロナウイルス感染についての発表でした。この時間帯の大半は当センターのワクチン接種会場におりましたので十分な視聴は出来ませんでしたが、予め送付された詳細なプレゼン資料から内容は把握できました。感染症専門医からの発表では、感染経路の90%が人から人への感染であり（残り10%は触れる物を介した感染）、最も有効な感染防御対策は「マスクと換気」であることが改めて強調されていました。100人以上のクラスター発生が起きた施設からは、外部から複数のICN（感染管理看護師）および自衛官による多大な協力を受けて終息させたという報告でした。また、利用者と家族の面会について、全国135の障害者施設にアンケート調査をして65施設（48%）が何らかの”オンライン面会“を実施しているという報告がありました。たとえコロナ禍が収束した後でも、直接面会が困難な高齢や遠方のご家族（オンライン操作が可能な方の援助は必要）の場合にも有効な手段ですので、オンライン面会の可能性を検討して行きたいと考えております。以上、協議会の報告をさせていただきます。

## 生活療育支援科・冬の企画『日本の冬を楽しもう♪』

生活療育支援科 田口美穂

2月17日（水曜日）と18日（木曜日）に、生活療育支援科冬の企画「日本の冬を楽しもう♪」を行いました。院内は新型コロナウイルス感染症対策フェーズ2の状況下でしたが、みなさんに安心してご参加いただけるよう2本立ての企画で実施しました。

1つ目はGo to企画「古民家&かまくら体験」です。2階生活療育支援科活動室3にかまくら、活動室5に古民家を再現。各病棟20分ずつという短い見学時間でしたが、幻想的なかまくらの風景とノスタルジックな古民家を、目・耳・鼻で楽しめるよう設定しまし

た。かまくらの部屋にはかまくらの他、ゆきだるまや雪見露天風呂、ランタン等を設置して白銀の世界を味わっていただきました。古民家には、軒に吊るされた大根や鮭などを見ながら暖簾をくぐって入ります。お雛さまや姫だるま、吊るし雛等が飾られ、床の間に掛け軸と生け花、囲炉裏には鍋がかけ、だしの良い香りが漂う昔懐かしい雰囲気を出しました。

2つ目は巣ごもり企画「謎解き鍋作り」です。事前に「鍋作りキット」をお届けし、各部署の中で挑戦していただきました。謎を一つ解くと、鍋の具材を一つ手に入れることができます。謎は2種類あって、A問題に正解すると定番具材が、B問題に正解すると高級具材が手に入ります。それぞれ味のある鍋が出来上がり、個性的な名前が付けられて、行事終了後に生活療育支援科活動室前に展示しました。

事後アンケートでは、Go to企画に「装飾や室内の雰囲気作りが工夫されていて楽しめた」、巣ごもり企画に「皆でワイワイやりながら楽しむことができた」等、おおむね『満足（楽しめた）』との感想を多くいただきました。「時間が足りなかった」「もっと利用者が参加できる企画にして欲しい」といったご意見もあり、次回の企画に活かしていきたいと思っております。



## 第63回日本小児神経学会学術集会 参加報告

小児科医長 栗原亜紀

今年の日本小児神経学会は、久留米大学小児科の主催により福岡で開催予定でしたが、コロナ禍のため昨年を引き続き、オンライン開催となりました。5月27日から29日まで、興味深い演題満載で行われましたが、オンデマンドは6月24日から7月30日まで配信予定となっておりますので、どうぞお見逃し無くご覧くださいませ。脳性麻痺、睡眠障害、レット症候群、学習困難、自閉症スペクトラム、ADHDなど様々なシンポジウムはどれも内容が充実しており、大変勉強になりました。WEB配信ですと、会場を駆け足で移動する必要も無く、次々と拝聴できるので便利でもありました。

今年は、海外医療についての講演も多く見受けられました。ケニアで「シロアムの園」という障害児医療を立ち上げられた公文和子先生の講演もあり、コロナ禍をケニアから来日され、2週間の隔離を経て登壇されました。実は、公文先生がシロアムの園を立ち上げられる前に、旧多摩療育園を訪問され、外来診療やリハビリ、通園を見学されています。ご縁の深い先生ですので、これからも応援しながら海外での医療現場について理解していきたいと思っておりました。ご興味ある方は、シロアムの園のホームページもご覧ください。（ホームページのURLは、<https://www.thegardenofsiloom.org/>です。）

私自身は昨年度まで10年と少し非常勤で外来診療を担当致しました多摩北部医療センターから、「地域中核病院での発達障害の診療と支援 続報」という演題を2016年日本小児神経学会における発表の続報として報告致しました。都内でもまだ発達センターを持たない自治体もあり、そんな地域での発達外来の現状、診療経過をWISC4で追った結果、卒業して診療終了できた患者様の増加、最後に発達に心配のある患者様たちが都内に予約待ちであふれている混乱をどうしたら解決していきけるかの提言、といった内容でんこ盛りとなりました。さらに統計的解析を加えまとめていくことで、都民のニーズを適切に把握し発達障害診療の発展に寄与できたらと思っております。

考察④ より多くの患者様を診ていくために 病院連携へ

